不可死の魔王

ネコノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不可死の魔王

【Ｎコード】
Ｎ４４５１Ｚ

【作者名】
ネコノ

【あらすじ】
ごく普通の高校でごく普通の生活を送る村上（かずや）一弥は平凡な生活に嫌気がさしていた。そんなある日、斉藤と名乗る謎の人物と出会う。斉藤に手渡された謎のディスク。それは異世界への通行証だった。ゲームのような異世界をクリアすると何でも望みが叶うと言う。そのディスクを使い一弥はゲームのような異世界へ向けて旅立つ。そこの世界で与えられた適正職業はなんと『魔王』だった。そして、そのゲームのクリア条件は魔王を倒す、つまり自分が死ぬことが条件だった。

プロローグ

自分の根城から少し離れた広大な草原の中。
剣の大きな一振りが周りの異形の魔獣を蹴散らした。
その衝撃波は多くの魔獣を紙きれのように貫いていく。
衝撃波の目標は俺だ。
とっさに剣を構えて衝撃波を受け止めた。しかし、反動は殺しきれず大きく後ろへと吹き飛ばされ、地面に背中を強打する。

起き上がらなければ負ける……
吐き気がこみ上げるのを堪えて立ち上がり、再び剣を構えた。
目の前のモンスターは次々となぎ倒され、やがてその人影は目前に迫る。

くる！

一太刀、二太刀と刃が迫るのを剣で受け流し、大きく後ろに下がった。
「あなたが魔王ね？」
襲いかかってきた敵はそう尋ねた。女の声。
目を上げると、１５０？ほどの小柄な少女が睨みつけていた。
彼女は赤い髪を風になびかせながら、アーマープレートは太陽の光を眩しく反射させて輝いていた。
この問いに答えるのは何度目だろうか……
「あぁ、そうだ」
無愛想にそう答え、剣を構えた。
「あなたを倒せばこの世界は平和になる」
平和になろうと何だろうと、負けるわけにはいかない……。

負けたくない……
僕は……、僕は死にたくない……

彼女は剣を構え、飛び込んでくる。
はやい！！　彼女の太刀を受け流しながら、後ろへと後退した。
はやくて見えない。このままじゃ……
かろうじて受けきっていた。しかし、対応しきれなくなり、やがて剣をはじかれた。
剣は手を離れ勢いよく回転しながら少し離れたところに突き刺さる。
そのまま体勢を崩し大きく地面に倒れた。
彼女はすかさず体にまたがり、刃を首へと押しあてられる。
「私の勝ちよ。観念しなさい！」
この状態からは逃げることは出来やしないだろう。
彼女の言うとおりこれで終わる。
結局、僕は死ぬのか……。

「これでおわりよ！」

目を瞑り、すべてをあきらめた。視界は消え、暗闇の中ただ祈った。

1―1　「現実とファンタジー」

「う、うわぁああ」
慌てて覆いかぶさるものを押しのけて起き上がった。
押しのけたものを確認……布団か。
視点を辺りに移し見渡した。
いつもの自分の部屋。
「夢か……」
荒い呼吸を落ち着かせた。
すでに、どんな夢だったのかすら覚えていなかった。ただ――
「僕って精神的に不安定なのかな？」
ここ最近、悪夢を見ることが多い気がする。

ジリリリリリリリリ！
大きく目覚まし時計が鳴りだす音。
時間だ……。目覚まし時計を止めて、ベッドを下りた。
ハンガーに掛けられた制服に素早く着替えて家を後にした。

いつもと同じ風景の中、高校へと向かった。
はぁ……。夢のせいか何度もため息がでてしまう。
２学期が始まって間もない時期、あとどのぐらい行かなければいけないか考えただけでも憂鬱な気分になってしまう。

学校が退屈でたまらなかった。特にやりたいことがあるというわけもなく、友達はいないこともないが、特別親しいこともない。
こんな空虚な毎日を抜け出したいと何度も思った。自分だけ周りと違う時間を生きているような感じだった。この世界には向いていない。
厨二といわれればそれまでだけど、何かみんなと違う気がした。

教室に入り、挨拶をすれば
「おはよう一弥」
と友人も同じように返答をしてくる。当たり前の反応だけど、どこか機械的で冷たく、友好関係もそんなものだった。
授業が始まり、特に学びたいと言うこともなくただ時間が過ぎる。
放課後になれば、何の楽しみがあるというわけもなく帰る。友人と遊ぶ時でさえ、ただ付き合ってるような感じさえする。

ほんとに僕って駄目だな……。

自覚がないわけじゃない。でも僕にとってこの世界はつまらなく感じた。
今日も一人で帰路についていた。
「はぁ、何かーーーー」
「世界が変わるような面白いことがないかな、ですか？」
ふとつぶやこうとした時、後ろから誰かの声が聞こえた。それは僕が考えていた言葉そのもの。そして、聞き覚えのない声に慌てて振り返った。
そこには声の予想通り見たことのない男が立っていた。男と目が合い男が話しかけてくる。
「こんにちは」
男はシルクハットの帽子を手で脱ぎ、まるで中世貴族がとるようなお辞儀をする。
格好はシルクハットにタキシード、顔は真っ白でサーカスのピエロのような顔。どこからどう見ても変質者にしか見えない風貌だった。
「……」
もちろん、こんな変な人間と会話する気などなかった。会話どころか関わりたいとも思わない。逃げようか……。
「あまり元気がありませんね。それともただの無口なのか……、っ

てちょっと！」
男が話を終える間もなく全力で逃げた。
ある程度の距離を走り、息を切らし、後ろを振り返る。
男は――――いない。追ってきてないようだ。
「いやー、急に走り出すからびっくりしました」
後ろから聞こえる声、その声に慌ててとびのいた。
「お、おまえ……」
後ろには先ほどの男が何事もなかったかのようにたっていた。
「おどろかせてすいません。あなたにとって良い話を――と思いまして」
「良い話？」
逃げても無駄な気がしたのでとりあえず話だけ聞くことにした。
「ええ、あっと、申し遅れました。わたくし斉藤と申します。以後お見知り置きを……」
お見知り置きと言われても今後関わりたくないけど……。
「その斉藤さんが何か用でしょうか？」
斉藤と名乗る男は気づかないぐらい一瞬でぐっと顔を近づけ
「はい、おめでとうございます！　あるゲームの参加者にあなたが選ばれました！」
「参加者に選ばれた？　僕は別に何も知らないけど……」
もちろん、話を聞いたこともなければ、そんなものに応募なんてした記憶もなかった。
「はい、今初めて話しましたので、それは当然かと」
斉藤と名乗る男は当然のように言った。
「応募とかもしてないけど？」
「はい、それはいりません。あくまでこちらで資質があるか厳選しているだけなので」
「厳選？」
「すべては言えませんが、世界が変わるような面白いことに当ては

まります」
「……？　どういうことですか？」
「それはですね、先ほど申しましたあるゲームというのは異世界を疑似体験できるというものでして、あなたのような方を探していました」
シュミレーターみたいなものかな？　なんにしても馬鹿にされてる気がするけど……
「そ、そんなものは――――」
男は一枚のCDを取り出し、目の前に着きだしてくる。
「これがあれば、あなたの望みがかなうかもしれませんよ？」
「の、望み？」
「はい、思うがままに」
本当に叶うのだろうか？　いや、そんなわけはないと思う。詐欺か？　もしくは頭のおかしい人の類。どちらにしてもこれ以上、関わるわけには……
「い、いらないので僕はこれで！」
CDを持つ男の手を振り払い、走った。
家はすぐそば……。全力で家まで走りドアに鍵をかける。
こ、これで大丈夫……。大きくきらした呼吸を整えようと深呼吸をした。
それにしても変なひとだったなぁ……。
男の言っていた事を思い出した。望みが叶うか……。
「望みが本当に叶うならいいけどね」
でも僕の望むことなんて叶わない事は分かり切っている。いや、誰もが抱く望みが叶うこと自体が少ないだろう。そんなうまい話があるわけない。
「叶いますよ」
再び男の声、そして目の前に現れ、驚きのあまりその場で崩れた。
「な、なんで！？　ど、どうやって入っ――」
何が何だか分からない。ドアのかぎを閉めたのに、家の中にいる

ことも不可解だが、何より不可解なのは男は逆さ――――つまり、天井から逆さに吊る下がったような格好だった。もちろんロープのようなものは見当たらなかった。
「う、浮いている！？」
「はい。このぐらいの事ならなんとでもなります」
「ゆ、幽霊なの？」
「んー、幽霊ではありませんね」
少なくとも人間には思えなかった。まだ、僕は夢でもみているのか？
男はこちらの反応を気にもせず、話し始める。
「どうでしょう？　参加しませんか？　クリアが条件ですが、あなたの望みは叶います」
「望み……」
「それに、この世界が嫌いでしょう？　参加するだけでも損はないと思いますが？」
親とも大した会話もなく、友人ともさほど親しくない世界。
「少しでも現状が変わるなら……、参加したい」
偽りのない本音だった。
男はにやりと不気味な笑みを浮かべ
「承知しました」
再びＣＤを目の前にかざす。
すると、男の目は光り出し、共鳴するかのようにＣＤも光り出した。
ＣＤからはルーンだろうか？　模様が浮かび上がる。
「このＣＤが参加証になります。パソコンかゲーム機にこれをいれてＴＶ画面を見ていただくだけで大丈夫です。参加後、取り消しはできませんので注意ください。なお詳しい説明はゲーム画面がしてくれますのでそちらで……」
ＣＤの光は大きくなり光に包まれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4451z/

不可死の魔王

2011年12月15日23時51分発行